

家畜衛生情報

東部地域畜産経営技術推進指導協議会
6 8 7 号
富山県東部家畜保健衛生所

西部地域畜産経営技術推進指導協議会
富山県西部家畜保健衛生所

2026. 8. 10

今年も猛暑にご注意ください..... 1
韓国でランピースキン病が再発生..... 2
今話題のマイクロ MIX 法とは? 2
ネズミについて考える..... 3
オーエスキー病の現状 3
☆夏の暑熱ストレスと牛の生産性への影響..... 4
☆農作業中の熱中症に注意しましょう 4

☆第 67 回東海・北陸ブロック家畜保健衛生
業績発表会が富山で開催されました 5
☆防疫情報..... 6
☆静岡県で 105 例目の豚熱が発生
全国初の選択的殺処分を実施 6
☆お知らせ 6

今年も猛暑にご注意ください



養鶏場で稼働中の細霧装置

最近「10 年に一度の暑さ」という表現にも特に驚かなくなってきました。今年は最高気温 40 以上の日の名称が酷暑日と定められましたが、すでに 7 月から東海地方や九州地方で酷暑日が観測されています。一方富山県においては、昨年の夏は真夏日が 85 日（平年値 47.1 日）、猛暑日が 29 日（平年値 8.1 日）、熱帯夜は 33 日（9.3 日）と平年を大きく上回る猛暑の年でした。今年も 7 月中旬から猛暑日が観測されており、3 か月予報でも 8 月は平年より気温が高くなる予報が出ています。

写真は管内の養鶏場で細霧装置が稼働している様子を撮影したのですが、今夏はさらにダクトファンも組み合わせることで、より効果的に冷却できるよう試行錯誤しているところだそうです。これからも厳しい暑さが続く見込みですので、送風機や細霧装置の活用、十分な飲水の供給など引き続き家畜の暑熱対策を実施しましょう。また、家畜だけでなく作業員自身の熱中症にも十分気を付けてこの夏を乗り切りましょう（関連記事 4 ページ）。

（西部家保環境課 宮本課長）

韓国でランピースキン病が再発生

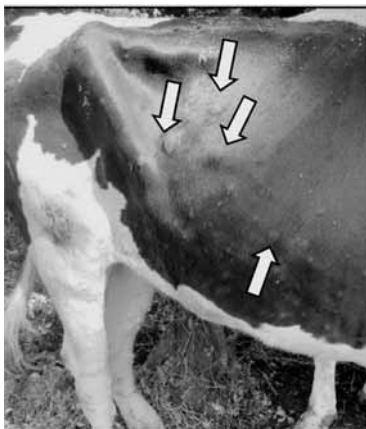
ランピースキン病については、家畜伝染病予防法の一部改正により本年7月1日付けで家畜伝染病に位置づけられました。このことにより、家畜伝染病予防法とランピースキン病防疫対策要領に基づいて、発症牛の早期発見、隔離、移動制限、殺処分、ワクチン接種等の総合的な防疫対策を実施することで本病の発生予防やまん延防止を図っているところです。

このような中、7月10日に韓国の肉牛農場でランピースキン病の発生が確認されました。韓国では2024年12月以来1年7か月ぶりの発生となり、発生農場における移動制限や発生地域でのワクチン接種、全国的な媒介昆虫対策の強化といった対策を実施しています。日本国内への侵入経路としては、発生国からの媒介昆虫を介した持ち込みの可能性が考えられ、韓国での発生により日本への侵入リスクが高まっている状況にあります。

牛飼養者の皆様におかれましては、下記を参考に改めて飼養家畜の健康観察、媒介昆虫対策や注射針等の交換・消毒を徹底し、万が一異状が認められた場合は速やかに家畜保健衛生所へ通報をお願いします。



韓国のランピースキン病発生状況
（農林水産省 HP より一部抜粋）



牛体表のランピースキン病の結節（左）と予防対策（右）：農林水産省リーフレットより抜粋

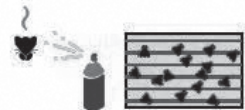
01 毎日の健康観察

早期発見・早期連絡が重要。
疑わしい牛は隔離し、牛の導入、
出荷、移動時は健康観察を徹底。



02 害虫の駆除

殺虫剤、粘着シート、
IGR剤等も活用。



03 清掃・消毒

衛生管理区域内の整理整頓を徹底し、飼養管理に使用
する器具や畜舎等の施設は清掃と消毒を実施。

（西部家保環境課 宮本課長）

今話題のマイクロMIX法とは？

マイクロ MIX 法とは、逆性石けんに微粒子状の水酸化カルシウム（マイクロ水酸化カルシウム）を混ぜて消毒効果を高める方法で、畜産現場の消毒力を高める革新的な技術として今注目を集めています。

畜産現場における一般的な消毒薬の一つである逆性石けんは、踏込消毒槽、車両消毒など広く用いられていますが、①低温下で効果低下、②有機物存在下で効果低下、③効果が出る病原体が限定的（ロタウイルス、口蹄疫ウイルス、豚サーコウイルス等のエンベロープのないウイルスに効果がない）という弱点があります。この弱点を補うのがマイクロ MIX 法で、逆性石けんとマイクロ水酸化カルシウムの相乗効果により、低温下や有機物存在下でも効果が増強され、エンベロープなしのウイルスを含む、より多種類の病原体に効果を示します。さらに、オルソ剤を配合したマイクロ MIX 法（右表）では、オルソ剤単独のコクシジウムオーストに対する効果を著しく増強することも確認されました。

マイクロ MIX 法という非常に強力な化学的手法と、長靴や衣類の交換といった物理的な手法を組み合わせることで、家畜防疫を一段上のレベルに引き上げることができると考えられます。

（西部家保防疫課 藤井主任）

オルソ剤とマイクロ MIX 法の配合割合の例

オルソ剤	100mL
マイクロ水酸化カルシウム	20g
逆性石けん	20mL
水	10L



（公社）畜産技術協会
HP で詳細公開中
左記 QR コードを読み
込んでぜひ確認を！

ネズミについて考える

令和8年6月4日から12日にかけて、つくば市の農研機構 動物衛生研究部門で開催された鶏疾病特殊講習会に参加し、飼養鶏について幅広く学ぶことができました。今回は病原体を持ち込む衛生害獣、特にネズミについて紹介します。

ネズミは鳥インフルエンザウイルスに感染するということが実験的・野外調査の両方で報告されており、衛生害獣としての重要度がますます増えています。また、衛生面だけでなく経済的被害も相当なもので、ドブネズミの直接的な被害の例を挙げると、まず、300gの成体は30g（自重の10%程度）の餌を農場で盗食するとされ、100頭の群れの場合、1日3kg、1週間21kg、**1年間では約1t以上の損失**が発生します。

殺鼠剤「ワルファリン」に対する抵抗性遺伝子をもつ個体の増加も報告されており、対策は一筋縄ではいきませんが、今すぐできる管理方法として、①整理整頓、②痕跡（糞、足跡等）の場所と量の継続的な記録、③壁や天井の穴の補修、④トラップ、殺鼠剤には馴致期間を設け、放置せず交換・再設置（右図参照）といった対策を「繰り返すこと」が重要です。

また、昨今はカメラ等でモニタリングし、出没パターンや繁殖時期からの予防的対策、それらの効率化に関して研究されています。衛生害獣対策は、鳥インフルエンザ等疾病対策はもちろん、飼養環境・経営改善にも資することから積極的な対応が望まれます。

（西部家保防疫課 藤井主任）



今すぐできるネズミ対策

オーエスキー病の現状

令和8年7月1日から10日にかけて農研機構 動物衛生研究部門で開催された豚疾病特殊講習会を受講しました。その中から、今回はオーエスキー病についてご紹介します。

オーエスキー病は、豚といのししを自然宿主とするヘルペスウイルス感染症です。哺乳豚では神経症状と高い死亡率、肥育豚では発熱や呼吸器症状、繁殖豚では流産や死産などの繁殖障害を引き起こします。また、感染後は神経節に潜伏し、ストレスなどを契機に再活性化することがあります。感染は豚同士の接触や鼻汁・唾液などを介した経口・鼻腔感染が主体ですが、汚染された器具や車両、人を介して伝播することもあります。牛や羊、山羊、犬、猫などにも感染することがありますが、発症すると重篤な神経症状を示し、ほぼ致死的な経過をたどります。

飼養豚については、国内では都道府県ごとにオーエスキー病防疫協議会が設置され、地域の清浄化状況に応じたステータス管理が行われています。令和6年3月31日時点では、茨城県、埼玉県、千葉県、群馬県のほか、宮崎県や鹿児島県などの一部地域がステータスⅢ（清浄化達成後も、継続検査により清浄性を確認する地域）として管理されており、それ以外の多くの都道府県はステータスⅣ（清浄性を維持する地域）となっています。長年にわたる防疫対策の成果により、令和8年現在、国内の飼養豚ではオーエスキー病の発生は確認されていません。しかし、この清浄状態は継続的な監視と防疫対策の積み重ねによって維持されているものであり、講習会では再侵入防止の重要性が改めて強調されました。

一方、野生いのししの調査では、東海、近畿、九州地方を中心にオーエスキー病抗体陽性個体が確認されており、野生いのしし集団内でウイルスが維持されている可能性が示されています。そのため、防護柵の整備や人・車両の消毒、導入豚の健康確認など、日常的なバイオセキュリティ対策を継続することが重要です。また、野生いのししに由来する感染リスクは養豚場だけの問題ではありません。近年では、狩猟犬がオーエスキー病ウイルスに感染した野生いのししの肉や内臓を摂食したことにより発症し、死亡した事例が報告されています。

今回の講習会を通じて、オーエスキー病は野生いのししを介した再侵入リスクを念頭に継続的な監視が必要な疾病であることを改めて認識しました。富山県においても、生産者、関係団体、家畜保健衛生所が連携し、県外導入豚の抗体陰性確認やモニタリング検査を継続することで、県内の清浄性を維持していくことが重要であると感じました。

（西部家保防疫課 中村係長）

夏の暑熱ストレスと牛の生産性への影響

7月30日、富山県畜産技術協会主催の令和8年度畜産技術情報研修会が開催され、農研機構 畜産研究部門から阪谷美樹氏を講師としてお招きし、「夏季暑熱ストレスと家畜生産～牛の繁殖を中心に～」と題してご講演いただきました。その中で、特に印象に残った内容を紹介します。

暑熱ストレスが牛の繁殖性に悪影響を及ぼすことは周知の事実で、妊娠期、特に乾乳期の暑熱ストレスは、妊娠期間の短縮や分娩事故率の増加、乳量低下などを引き起こします。加えて、母牛の体内で暑熱ストレスを受けた娘牛にも、1～3産目の乳量低下、空胎期間の延長や受胎率の低下といった悪影響が現れます。さらに、孫牛についても暑熱ストレスにさらされた娘牛の卵子から誕生しているため、生産寿命の短縮や1産目の乳量低下といった部分的な影響が報告されています。つまり、暑熱ストレス対策は今夏のみならず、将来の経営面においても必要な対策であることが分かりました。

そこで対策ですが、暑熱の指標である THI（気温と湿度から導出）自体を下げることは難しいので、体感温度を下げる風速の確保が重要になります。秒速2メートル前後から体感温度は下がりますが、湿度が高いと効果は低下するため、ミストを併用する場合は湿度の確認が必要です（そもそも湿度が80%以上になるとミストの効果は少ない）。加えて、暑熱対策を実施する優先順位を考えた場合、**乳牛では乾乳期の牛が暑熱の感受性が高い（分娩後の乳量だけでなく繁殖性や子牛への影響など将来的な生産性に広く影響）ため、優先的にケアすることが重要**です。また近年は、暑さに強い品種や個体の選抜も注目されています。ホルスタイン種では、暑熱下で体温が上がりにくいスリック遺伝子を保有する牛が注目されており、海外研究では夏場の乳量低下が少なく、発汗量が多いため効率的に放熱できることが示されています。なお、スリック牛は被毛が薄く短いのが特徴ですが、通常の牛の毛を刈っても体温は下がりません。

富山県の年平均気温は10年あたりで0.25℃上昇していて、今後も猛暑日や熱帯夜の増加が予測されており、暑熱対策をより高度に実施していかなければ対応できなくなる時代がやってきます。送風機や細霧装置の設置、寒冷紗による日差し対策など、実施可能な暑熱対策を着実に進めていただければと思います。また、国内でもスリック種雄牛の精液が流通していますので、対策の一つとして利用してみてもいいかもしれません。（西部家保環境課 米澤主任）

農作業中の熱中症に注意しましょう

8月に入り猛暑が続いています。近年は農作業中の熱中症による死亡者が増加しており、令和6年の熱中症による死亡者数は全国で59人と、前年の37人から大幅に増加しています。また、5～9月の期間は夏場の高温による疲れの影響により、高所からの転落や草刈り作業中の事故も増加しています。

農作業は一人作業が多く、熱中症になった際に自分では症状を自覚しにくいことから、熱中症が重篤化しやすい傾向にあります。そこで、農林水産省では「いのちをうばう、夏のひとり作業」をキャッチフレーズに、7～9月を熱中症等対策声かけ期間として全国で啓発運動を展開しています。



農作業中の熱中症による死亡者数
(農林水産省熱中症対策パンフレットより抜粋)

声かけ活動のポイント

家族で



作業前後だけでなく、作業中もこまめなコミュニケーションを

- ☐ 「水分、持った？」
- ☐ 「体調が悪くなったら、すぐに連絡して」

職場で



その日の体調や暑さに応じて柔軟な声かけを

- ☐ 「顔色わるいよ、休憩しよう」
- ☐ 「WBGT 値が高いから、昼は作業を中断しよう」

地域全体で



顔を合わせたら、まず一声声かけを

- ☐ 「今日は熱中症警戒アラートが出るよ」
- ☐ 「夏は疲れやすいから、高い所も気をつけて」

熱中症事故は、周りの人がお互いに気を配り、声をかけ合うことで、防げる可能性があります。大切な人の命を守るため、家族や地域で声をかけあいましょう。



農林水産省
熱中症対策サイト

農林水産省 夏の熱中症等対策声かけ期間チラシより抜粋

(西部家保環境課 宮本課長)

第67回東海・北陸ブロック家畜保健衛生業績発表会が富山で開催されました

令和8年7月17日、富山県民会館にて第67回東海・北陸ブロック家畜保健衛生業績発表会が開催されました。この発表会は、家畜保健衛生所の事業、調査等における業績について、東海・北陸ブロック7県で発表及び討議を行い、畜産の現況に即した家畜保健衛生事業の改善向上に資することを目的として7県持ち回りで開催されています。

今回発表された演題の中から、9月16～17日に東京都で開催される第67回全国家畜保健衛生業績発表会に選出された演題をご紹介します。



業績発表会の様子

○「管内酪農場における牛伝染性リンパ腫清浄化に向けた取組み」静岡県東部家保 秋山利恵

管内2酪農場で牛伝染性リンパ腫（EBL）対策を実施。衛生管理、母乳・吸血昆虫対策、淘汰に加え、A農場では抵抗性遺伝子保有牛の確保を、B農場では配置替えを追加で実施した結果、陽性率や高リスク牛、新規陽性頭数が減少。農場の状況に応じた対策の継続により清浄化を目指す。

○「繁殖豚における尾静脈採血導入の検討と課題」石川県南部家保 磯辺真由美

繁殖豚の採血で保定者不足に対応するため、尾静脈採血法を検討。作業上生じた課題について全国の家保に調査を実施。調査の結果、複数人での同時採血や穿刺部位の工夫により、頸静脈採血と同程度の作業時間で実施可能と考えられた。採血手引きを作成し、今後も実践を重ね負担軽減を図る。

○「防疫対応力強化に向けた研修と動画活用の取り組み」愛知県中央家保 玉生英久

令和7年1月の高病原性鳥インフルエンザ同時多発事例での混乱を踏まえ、家畜防疫員研修と鶏の殺処分手順動画を作成。指揮担当毎の実践的な研修により家畜防疫員の役割理解が深まり指示精度が向上。動画映像や音声解説を活用して作業の標準化、動員者の不安軽減を図り、円滑な防疫体制の構築を進める。

○「胸腺低形成子牛における *Aspergillus fumigatus* による疣贅性心内膜炎の一例」福井県家保 新田愛

胸腺低形成の肉用子牛で、*Aspergillus fumigatus* による僧帽弁の疣贅性心内膜炎を確認。真菌は心臓、腎臓、脳病変に関与しており、極めて稀な症例。胸腺低形成は日和見感染のリスクとなることや母牛の妊娠後期の栄養管理の重要性を農家に注意喚起。子牛の病性鑑定時は胸腺の評価と真菌関与の考慮が必要。

○「豚熱のウイルス希釈法中和試験の確立によるワクチン免疫評価」岐阜県中央家保 桑田桂輔

豚熱ワクチン接種後の抗体評価について、高感度なウイルス希釈法中和試験（VDNT）を確立。従来法で陰性とされた検体の一部から豚熱防御可能な微量の抗体を検出。県内農場の真の抗体獲得率は平均91.3%と評価。従来法とVDNTの併用により、より精密なワクチン免疫評価が期待される。

○「肉用鶏農場における *Enterococcus cecorum* 感染症の発生と再発防止対策」三重県中央家保伊賀支所 佐藤福太郎

管内肉用鶏農場で、起立困難を示す鶏から *Enterococcus cecorum* を分離。病性鑑定後、農場へ続発・再発防止対策を説明し、全鶏舎のオールアウト、清掃・消毒を徹底。特に発生鶏舎では水洗後に有機物除去剤を用いた清掃で続発・再発防止に努めた。対策実施後に導入したロットで発生はなく生産成績も回復。

当県からは、東部家保の林獣医師が発表した「牛サルモネラに対する防疫対応の再構築により清浄化を達成した一事例」が選出されました（内容の詳細は本誌681号に掲載）。防疫対応の問題点や課題は担当者間の引継ぎだけでは整理されにくいですが、手引きを作成することで全員に共有できる形になり清浄化につながった点が評価されました。

選出された各県代表の皆様におかれましては、全国大会という大舞台で素晴らしい発表をされることを期待しています。

（西部家保環境課 宮本課長）



富山県代表に選出された林獣医師（写真右）

防 疫 情 報

全国の主な家畜伝染病の発生

豚熱（法定伝染病）

（7月 31 日現在）

事例	発生日	発生場所	経営形態	飼養頭数	備考
105	7月4日	静岡県富士宮市	一貫	約1,200頭	選択的殺処分

県内の主な家畜伝染性疾病の発生

病 名	畜種	発生日	戸数	頭羽数	備考
牛コロナウイルス病	牛	6月4日	1	1	
		6月30日	1	1	
牛コロナウイルス病と牛パストツレラ症	牛	6月4日	1	2	
牛コロナウイルス病と牛コクシジウム病	牛	6月30日	1	1	
豚レンサ球菌症と豚パストツレラ症	豚	7月2日	1	1	
豚パストツレラ症	豚	7月2日	1	1	
		7月3日	1	1	
豚鞭虫症	豚	7月8日	1	1	
豚丹毒（届出伝染病）	豚	7月28日	1	1	と畜場発見
鶏クロストリジウム・パープリングェンス感染症	鶏	5月25日	1	1	
山羊のコクシジウム病と拡張条虫症	山羊	7月15日	1	2	

県内における野生いのしし豚熱 PCR 陽性事例（令和8年4月29日～7月29日検査実施分）

	発見状態	発見又は捕獲日	発見又は捕獲場所	成長区分	性別
1	捕獲	6月23日	氷見市小窪地内	成獣	雄
2	捕獲	6月29日	氷見市谷屋地内	成獣	雄
3	捕獲	6月30日	黒部市柳沢地内	成獣	雄
4	捕獲	7月8日	氷見市寺尾地内	幼獣	雄
5	捕獲	7月20日	氷見市戸津宮地内	成獣	雌

静岡県で105例目の豚熱が発生 全国初の選択的殺処分を実施

令和8年7月4日、静岡県富士宮市の養豚場で豚熱が確認され、国内105例目の発生事例となりました。今回の事例では、本年5月の家畜伝染病予防法の改正で導入された「選択的殺処分」が全国で初めて適用されました。選択的殺処分とは、発生農場の豚を全頭処分するのではなく、検査結果やワクチン接種状況などを基に感染が確認された豚や感染リスクの高い豚のみを処分する方法です。今回の農場では、肥育豚や子豚など1,230頭が殺処分されましたが、感染リスクが低く、臨床症状が認められなかった母豚約130頭は存置されました。

豚熱ワクチンの接種が進む中でも、ウイルスが農場内に侵入するリスクは依然として存在します。農場を守るためには、車両や人の出入りの管理、農場専用衣服・長靴の交換徹底、野生いのしし対策など、日頃からの飼養衛生管理が重要です。今回の事例は、防疫と経営継続の両立を目指す新たな防疫対応として注目されており、全国の養豚農家にとっても大きな関心事となっています。なお、一連の防疫措置は7月21日に完了し、静岡県は防疫対応の終結を公表しています。

（西部家保防疫課 中村係長）

☆ お 知 ら せ ☆

催 事 等	期 日	場 所
北陸三県和牛子牛市場	8月27日	北陸三県家畜市場（金沢市）

発 行 所 富山県東部家畜保健衛生所 https://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1687/
〒939-3536 富山市水橋金尾新4-6 電話(076)479-1106 F A X (076)479-1140
編 集 者 宮本 剛志（富山県西部家畜保健衛生所）
○最新号は右のQRコードからいつでもご覧いただけます。

